

石中先生行狀記

石坂洋次郎

石中先生行狀記

石坂洋次郎文庫

6

新潮社版

石中先生行状記

石坂洋次郎文庫 6



価 490 円

Printed in Japan

© Y ISHIZAKA

昭和41年 8 月25日印刷

昭和41年 8 月30日発行

著 者 石坂洋次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町71電話
(260) 1111 振替東京 808

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 新宿加藤製本所

〈乱丁、落丁本はお取替えいたします〉

目次

石中先生行状記

隠退藏物資の巻

七

同窓会の巻

二六

もすもすの巻

四〇

エロ・ショ一の巻

六四

林檎景気の巻

七三

髪結所の巻

一〇六

人民相談日の巻

一二〇

根ッ子町の巻

一三三

タヌキ騒動の巻	一四
仲たがいの巻	一六
アイ・ラブ・ユーの巻	一八
黒いワンピースの娘の巻	二〇
貸と借の巻	二二
祭礼の巻	二四
夫婦貯金の巻	二五
青銅時代の巻	二六
無銭旅行の巻	二七
干し草ぐるまの巻	二九
人民裁判の巻	三六

馬車物語の巻

三七〇

不幸な女の巻

三九六

ケチンボの罪の巻

四一八

ばかな亭主と利口な女房の巻

四三五

著者だより

四五三

解説・丸岡 明

四五六

石中先生行狀記

隱退藏物資の巻

一

小説家、石中石次郎氏の疎開先の住宅は、座敷が南に面した、明るい二階家だった。こう書くと、都会の人たちは、住宅が南向きにつくられてるのは当り前のことじゃないか、というかも知れない。そこからして話の喰い違いが生じてくる。

石中氏は、郷里である東北地方のH市に疎開しているのであるが、そのH市は人口六万余、公私の専門学校が五つもある地方都市でありながら、散歩好きな石中氏の觀察したところによると、ほとんどの住宅が、通風、採光という、住宅の基本的な条件を無視して建てられている。商店などは店が大切だから、南や東を塞がなければならぬ場合もあるが、敷地に不自由のない住宅街を歩いてみても、たいへん陽当りなどクソ喰らえて建てられた家ばかりである。

それでは全くでたらめかというと、そうでもなく、そこにはまたおのずから一定の様式が認められる。それは往来からの外見がよいような建て方をしているのである。だから、地所が道路に面している方向に、北向きだろうと西向きだろうと、お構いなしに家を建て、座敷をつくってしまふ。石中先生が、疎開早々、貸家探しに奔走していたころ、ある空家で、

「陽当りはどうですか？」と尋ねたところ、家主に、「当りますとも。夏などは西日がよくさして座敷におれないほどですよ」と大真面目に答えられて、面喰らった記憶がある。こんな訳で、家屋のよしあしは、床柱がどこ産だとか、式台が何の板だとか、結局、建築費用の多寡だけで評価されるのである。

自分たちの生活の利便よりも、人の思惑を気にする、体裁をはる。——家屋の建築様式に見られる、こうした傾向は、まだまだ人々の生活の中に、ひろく奥深く根をはっているとみるべきで、都会と較べて、地方ではことにそれはなほだし。

ところで、戦後はやり出した民主的な文化運動のいき方をみていると、こうした生活の下部構造に関する古い觀念を是正していくことは考えず、もっと上っ面の方を体裁よ

く迂^{まが}っていったる感じで、どうもピッタリしない。街の知識層の青年たちの在り方をみると、まず「どん底」を演じ、ベートーベンを鑑賞し、サルトルを論じるという傾向だし、一般大衆はコンタールやダンスに熱中し、勤務先でストライキ騒ぎをやって、これまた、以上終りであり、誰も自分たちの暮らし方の実体を反省に上せようとはしないのである。疑いなきを得ない……。

で、秋のある朝、石中石次郎氏は、明るい茶の間の炉端^{ろばた}に胡坐^{あぐら}をかいて、遅い朝飯を食べていた。ここでちょっと断^{ことわ}わっておくが、石中氏の住宅は、茶の間と座敷の間に玄関があり、門から入って来た客は、茶の間の前の通路を通って玄関に行くように出来てゐることだ。だから、客の側からいえば、門を入った途端に茶の間の内部がすっかり見通される訳で、あっ、ヤミ菓子^{やみかし}を食^たつてゐるな、林檎^{りんご}を齧^かつてゐるな、外国煙草を吸^すつてゐるな、細君が留守の間に若い女を曳^ひっぱりこんでゐるな、というような事柄が、一と目で判明するのである。そしてこういう家のつくり方は、住み手の石中先生にしてみればまことに工合のわるいことで、この点が、珍しい南向きのこの家のただ一つの欠点であろうと、常日頃、不満に思つていたのであった。

げんにその朝も、食事最中に、二人の人物が門から入っ

て来た。一人の男は、毛糸の赤い帽子をかぶつて膨^{はふ}れたリユックを背負い、上衣とズボンがくっついた鼠色^{ねずみいろ}の作業衣をつけ、シャベルやツルハシを、鉄砲のように肩に担^{かか}いでいた。陽^ひやけた顔には、度の強い眼鏡をかけており、物を見るのに顔全体を歪める癖があるこの男は、石中先生の知り合いの中村金一郎君である。

中村君は、元来石中先生の愚弟の同窓生で、本職は時計屋なのであるが、本職そっちのけで、拳闘^{けんどう}や興行に關係し、人の儲け仕事やいざこざに、しょっちゅう忙しく飛びまわっている人物だった。一種の顔役に違いないが、陰気なところがなく、ノンビリして、いつも貧乏^{ひんぱん}しているので、玄^{くろ}人^{ひと}にも素人^{しら}人^{ひと}にも信用があり、石中先生なども、疎開以来、なにかと世話になつてゐる間柄だった。

もう一人の男は、初対面の人物であるが、元の軍服をつけて腰に細引の束^{つか}を吊^つるし、やはりツルハシを担いで、まるまると肥え太った身体つきをしていた。肥^ふった人間に悪人なしとかいうが、その男も、顔がツルツルと赤らんで、目がクリッと剃^ひき出し、耳の大きな子供染^じみた感じの男だった。

「お早よう、先生、いま朝飯ですか。……もう出かけますよ。支度してください……」

中村君はそう言いながら、縁側に近づいて来て、何ということなしに、背伸びをして食卓の上を眺めてから、ニヤッと笑い出して、

「あれ、納豆を食ってますな、納豆を——。いや、全く熱いまんまに納豆ときたらこたえられませんか。やっぱり先生も好きですか。……しかし先生、納豆をそんな食い方をしては不経済ですよ。納豆の粒が醬油に浮くぐらいにして、御飯にぶっかけて食うと、十粒ぐらいで一杯の御飯が食べられますよ。……お湯が沸いてたらお茶を一杯いただきますかな。カラ茶で結構ですよ。……おい、河合君、来たまえ……」

それまで、門の所でためらっていた男は、そう呼ばれると、急にクルリと後ろをふり向いて、門の内側に小便をし出した。そしてきちようめんなタチとみえて、腰をよく振ってから、こちらにやって来た。

「先生、御紹介します。このヤミ肥りした人が、元憲兵伍長、河合勇三君です。……石中先生だよ」

河合君は、餅のように膨れた手を頭にやって、恐縮そうに縁側に腰を下ろした。

「K村の役場に勤めてるっていったね？」

と、石中先生が声をかけると、河合君は大きな頭で頷い

て、

「そうです。……僕は先生にはじめてお目にかかるのですが……、僕の母方の、伯父の、細君の、従弟の……木戸又吉は前から先生をよく知っているとか言っていました」

「フーム。木戸又吉？……思い出せないね」

「先生のお父さんと知り合いだったそうです。なんでも、先生が中学三年の時、サーカスの女の子に憧れて、学校を休んで隣町のサーカスを追いかけて行ったのがバレて、停学処分になりましたので、木戸又吉は先生のお父さんに頼まれて、校長の所へ……」

それ、この通りきちようめんだ……と石中先生は大きく目瞬きをして、

「ああ、君、木戸又吉さん、知ってるよ、……よく知ってるよ。まだ健在かね？」と、煙草の煙りと一緒に、フーと軽い嘆息を吐いた。

「青春華やかなりし時代ですな。先生」と、中村君はなんの興味もなさそうに、わきから言葉を挟んだ。

あのころ……こんな貧相な田舎町では、「美しき天然」をジントのメロディーにのせてまわって来るサーカスが、青少年のロマンチックな夢をそそるいちばん派手な観物だった。しかし、中学三年生の石中石次郎が、サーカスの女の

子に憧れて後を追ったというのは誤りで、友達だった年上の女学生と、学校をエスケープして、隣町へサーカスを見に行ったというのが、事の真相である。その女学生も、数人の子供の母親として、あるいはもう祖母として、どこかこの近くに住んでいるのだらうし、とかく郷里というものは、息苦しく煩わしい。過去が背中にじかにおぶさっている重い感じなのである。少しうろ覚えだが、室生犀星の詩に、

ふるさは遠きにありて思ふもの
そして悲しくうたふもの

よしや

うらぶれて異土の乞食となるとも

帰るところにあるまじや

.....

というのがある。もし石中先生が、もっと年齢が若く、気性が烈しければ、この詩に唄われた悲しみを自分のものとして感じたのであろうが、人生の恥ずかしい経験をたくさん積み重ねた今日では、すべてに忍従する気持が強く、感情を興奮させることは滅多になくなった。納豆も、木戸

又吉も、立小便も、サーカスも、女友達も、すべてよしと
いう、疲れたほろ苦い心境であった。

二

「さあ、それでは行くかね。ちょっと、待ってくれたまえ」
食事を済ませた石中先生は、茶の間の隣の納戸に入っ
て、短袴やシャツに着更えて出て来た。

「僕もシャベルかツルハシを持とうかね？」

「ハハハ……。お止しなさい。先生だとツルハシと一緒に
身体も土の中にめりこんでしまえますよ。散歩の時の杖を
お持ちなさい。それだけでいいですよ」

中村君は狭い顔をクシャンと歪めて、おかしそうに笑っ
た。

石中先生は、ビケ帽をかぶり、黒いズツクの運動靴を穿
き、手拭を首に捲いて、玄関から庭に出た。中村君に言わ
れた、名所土産の細い竹のステッキをシャベル代りに担ぎ
ながら……。

三人は、秋の陽を身体中に浴びて、洗われたようにきれ
いな屋敷町の往来を歩き出した。

「どうですか、河合君。今日の発掘は見込みがあります
かね？」と、石中先生は右隣の元憲兵伍長に話しかけた。

「自信がありません、どうも。そりゃあたしかに自分が立ち会ったんですから、埋めたことはたしかなんです、でも終戦のラジオがあったその晩でしょう。鼻をつままれても分らんような暗夜でしてね。××少尉の指揮で、兵六十名が作業に当たったんですが、あの時の混乱した気持では、ドラム罐かんなど、誰も惜しいとも大切とも思いませんでしたからね。それに三年後の今日では、練兵場がすっかり林檎畑に変わってしまっておりまし……」

「君イ、そういうなよ。あると思えばあるし、ないと思えばない。物事ってそういうもんだよ。君みたいにはじめから弱音をふいては話にならんよ。僕は前祝だけで、もう二度もやったんだからね。元手がかかってますよ。何ですか、男らしくもない……」

中村君はムツとした調子で抗議を申しこんだ。

これだけの会話からも想像されるように、三人はこれから、郊外の元練兵場であった場所へ、終戦の下サクサに埋められた、ドラム罐四百六十本を発掘に出かける途中なのである。専門語でいえば隠退蔵物資を摘発しようというのであって、中村君からちゃんと警察の了解を得てあり、決して疚やましいことをしようというのではないのだ。

こうなっただいきさつは……あまりパツとしたこともな

い、このごろの世間に、どこからともなく、ドラム罐埋没の噂うわさが流れ出し、尾に鱗うろこがついて、話の上の権利だけに値段をつけるヤミ師も出て来るありさまだった。この情勢に對して一種の義憤を感じた中村君は、一念発起して、自分がドラム罐の摘発にのり出すことになり、町の内外に情報網を張りめぐらした結果、当時ドラム罐の埋没作業に立ち会ったという元憲兵伍長、河合勇三なる人物が、K村の役場で書記をしていることが判明した。そこで中村君は、河合君の引き出し策に努め、尻込みをする河合君を、国家的見地から激励して、協力を約束させ、ついに発掘一番槍の権利を獲得したのであった。

その経過を石中先生に報告に來た中村君は、ついでに、「どうです、先生も一緒に行きませんか。昼飯は私が支度して行きます。ドラム罐が出なくも、あの辺は景色がいいから、遠足したと思えばいいですよ。……河合君と一緒に三回ほど地形調査をやって、大体的見当をつけ、その林檎園主も賛成して、一枚加わることにしておりますから……」

「フム。そりゃあまあ行ってもいいがね……」

石中先生はうつかりそう答えながら、いま東京の家にいる細君が「一人暮らしでも、娘たちの嫁入りの邪魔になるよ

うなことはなさらないでね」と念を押して行ったことを思い出した。隠退蔵物資の摘発が、娘たちの嫁入りの邪魔になるかどうか……。

「中村君、君は一体、ガソリンを掘り当てたらどうするつもりかね？」と、石中先生は秋晴れのお天気に気分をよくして、竹のステッキで、ビュービュー空気を蹴きながら尋ねた。

「どうするって、先生。私は金でなく現物でほうびを貰うつもりですよ。二割が規則です。いや、四割だったかな。

そうですね、まずそれをもたらしたら、どこかのボロ自動車を曳っぱり出して、友達をギューギューに載せ、めまいがするほど方々乗りまわしますよ。みんなドライブには飢えてますからな。あまった分は、いい値で売って、なんか商売の元手にしますよ。拳闘の道場でも立てるかな……。河合君は嫁でももらうんでしょう……」

「すると君、わしのライター用のガソリンなども十分もらえるね？」

「チェ！、さらせますね。ドラム罐が四百六十本ですよ。ライターとは何事ですか……」

「いや、でも、君。わしはほかにガソリンの使い途を知らんからね」

「いいでしょう。いくらでもおとりなさい。だが、先生にしろ、河合君にしろ、間違ってますね。物事というものは、前後の気分から楽しんでかかるものですよ。はじめはばかにしくさって、ドラム罐が出た時だけ目の色を変えるというんでは、あさましい話ですよ。ね、地面には林檎の木が枝をひろげていちめんに植わっている。向うの青空には秀峰岩木山が聳えていて。そして、いいですか、処女の股のごとくに柔らかい畑の黒土の下には、四百六十本のドラム罐が、杵^{きね}みたいにニョキニョキと埋まって、掘る人待っている。先生、まるで楽しいじゃありませんか！」

「ウン、楽しいね……」

「おい、河合君、君これで当てないと、まだ当分嫁などもらえないぞ。張りきってくれたまえよ」

「ええ、全くだす。張りきりますとも……」

元憲兵伍長の河合君は、嫁の話に刺激されたのか、顔をなまなましく赤らめて、大げさに両肩をもち上げてみせた。肥って呼吸がきれやすいとみえ、フウフウいいながら、もう首筋や額の汗を拭いている。

町から部落に道がつづいていた。この部落は、通りの裏手がすぐ広い林檎畑になっており、近年林檎の景気がバカによかったので、ところどころに、ガッシリしたトタン葺

きの本建築の新しい住宅が、棟上高く聳えている。見た目は立派そうだが、例の、文化を感じさせない建て方の家ばかりだった。文化的な生活を営むには、ある程度金銭の裏づけが必要だが、金銭はそのままでは決して文化にはならないのである。

T部落をすぎると、松並木の野合い道になる。ここは道幅もひろく、それに並木の松がいずれも天を摩するような亭々とした老木ばかりで、ゆっくりした風趣に富んでいる。

右手に広い柵をめぐらした一画は、旧××部隊の営舎で、いまは引揚者や戦災者の仮住宅に使用されていた。左手はいちめんの林檎畑が海のようにひろがり、背の低い枝の波の上には、岩木山が端麗な姿を現わしていた。

ふと石中先生は、並んで歩いてる中村君が、さっきから口の中で、暗算のようなものをブツブツ唱えているのに気がついた。はじめは低くてよく聞えないが、しだいに高くなつて「六九、五十四……」という所へ来ると、グツとかえて、また最初へ逆戻りする。四百六十本のガソリン代を計算してらしいのだが、よほど高額な計算とみえて、何べんやっても「六九、五十四」より先へはすすまないものである。石中先生は気の毒に感じた。

松並木が尽きたあたりで、林檎畑の間に、左斜めに細い道が通じていた。

「これを入れていくとすぐですよ。もうこちらの土をたたくと、底の方でゴボゴボ音がするかも知れませんが」

中村君はいくらか気負いたって、肩にしていたツルハシを下ろして、ドシンと地面を突っついてみた。と、ゴボゴボという音の代りに、しわがれた男の声が聞えた。

三

「やあ。きましたですな。待っておりあした。わし一人で仕事を始める訳にもいかねえだし……。ヒヒヒ……」

そう言つて、曲りくねったひば垣の蔭から出て来たのは、陽やけして頬のこけた五十年配の男で、小ざっぱりした仕事着をきており、髪はゴマ塩で、片方の目が変に青味がかつて大きく、どこやら生々しい感じのする百姓だった。

「やあ、山崎さん。……林檎園の主人の山崎さんです。ソラ、たしかに石中先生を御案内して来たからね！」

「へえ、これは石中先生。ようこそ！ 先生がお出でくださったからにや、もうだいじょうぶですよ。ヒヒヒ……」

山崎園主は黄色い歯を剥き出して、お愛想に笑ったが、どこやら下卑（げひ）ていて感心できなかった。

「いや、君。わしが来たからって安心されては困るよ。わしの目は、土の中の大根がどっちに曲って生えているかも見通せないんだから……」

垣根の蔭に、赤い色がチラツとしたかと思うと、それまで石中先生の隣に立っていた元憲兵伍長、河合君が、その肥った身体にも似合わぬ素早さで、赤い色の方に飛んで行った。

「おお、モヨ子ちゃん。こないだはどうも。貴女から頼まれたクリームを今日もって来ましたからね」

「まあ、嬉しいわ。河合さんは親切ね……」

モヨ子は山崎園主に似た顔立の娘で、背は低いがポツテリ肉づいており、赤味がさした頬の肉などはちきれそうに盛り上がって、鼻がひくく見えるほどだった。少し眇目だったが、年頃だけに、それが「白痴美」といった感じを漂わせているところもあり、ともかく、トキ色の三角巾、紺緋の前垂と手甲、赤緋の手織りのモンペなどで装われたモヨ子の様子には、顔形の美学的な批判をヌキにして、いきなりとって食べてしまいたくなるような心やすい魅力が溢れていた。

で、元憲兵伍長君はそばへひつついたぎり離れようともせず、二人でベチャクチャしゃべりつづけていた。中村君

は苦い顔をしたが、かつてサーカスの女の子に憧れた石中先生は、河合君の心境に大らかな理解を抱いた。

山崎園主は畑をすみかとしているらしく、林檎の木の間の空地に、小綺麗な住宅を構えていた。座敷を開け放し、拭き清めた縁側に、西瓜、林檎、お茶道具などを並べてあるところを見ると、石中先生の一行を歓迎していることが分る。

「なあ、中村さん。わしは邪魔が入ると煩いと思うて、昨夜こんなものをこきえておいたんだが、どうじゃろな……」

山崎園主は床の間に立てかけてあった、新しい立札のようなものを抱えて来た。それには禿びた筆の走り書きで、「××警察署御許可、石中先生摘発隊、無用ノ者立チ入ルベカラズ」と認められてあった。

「ウーム。よろしいでしょう」と石中先生は、思わず顔をそ向けて答えた。

「それじゃ入り口に立てて来ますべえ……」と、山崎園主は手柄顔に立札を担いで行った。

明るい縁側の日向で、ナフタリン臭いお茶を啜ってから、上衣を脱いだり、腕まくりをしたり、みんな発掘の支度にとりかかった。

「さあ、河合君。鼻を利かせてくれたまえよ。どこ掘れワ